

精神障害者の就労・自立を支援するNPO法人

認定NPO法人 多摩草むらの会

東京都多摩市鶴牧1-4-10
メンバー480人、スタッフ178人

力の弱い野ウサギが遠くに生えているニンジンを手に入れるには、外敵から身を隠すための草むらが必要である。安心できる草むらがあれば、そこを拠点にして、野ウサギはさらに広い世界を探索できるようになる…。精神科医、中井久夫氏のこの言葉に共感して、多摩総合精神保健福祉センターのデイケアに通所していた精神障害者の家族の会は、自分たちに「多摩草むらの会」という名をつけた。精神障害者に社会への適応を促すには、1人ひとりに合ったいろいろな草むらが必要である。そのために、畑で野菜をつくったり、公園清掃を引き受けたり、寒天料理の店やパソコン教室を開いたり…などの事業を展開。現在は東京と神奈川の19市から480人の精神障害者たちがここに集い、就労体験を重ねながら、社会への巣立ちを目指している。「多摩草むらの会」誕生のいきさつ、事業立ち上げの苦労談、現在の活動状況などを、風間美代子代表理事に聞いた。

■風間さんの場合

「多摩草むらの会」の代表理事、風間美代子さんの場合は、大学浪人中の長男が統合失調症を発症した。受験に集中できなくなり、厳しかった父親を避けるように何日も、何ヵ月も自分の部屋に引き籠ってしまった。長男はあるとき、冷蔵庫から玉子を取り出

し、母親の風間さんの目の前でそれをポトリと落とした。床の上で玉子がグシャッと割れ、驚いた風間さんが「どうしたの?」と聞くと、「僕はこんなふうに壊れていく」と言ったという。またあるときは、思い出を消してしまいたいと自室に火をつけ、燃え広がる一步手前で、風間さんがかろうじて消し止めた。それがきっかけで、長男は自分から精神科を受診すると言い出した。

「統合失調症です」。若い医師が2人にそう告げた。「なぜここまで、ほうっておいたのですか?」と非難するように言い、「すぐ入院させてください」と、長男を、窓に鉄格子のある鍵のついた病室に閉じ込めた。「完治は難しい」という医師の突き放した言葉が悔しくて、1人で帰るバスの中では



風間美代子代表理事

ろぼろ泣いたと、風間さんは言う。「完治しないなんて、そんなことにはさせない。私の力で長男と再び笑い合える日をきっと取り戻す」と心に決め、新宿の書店で精神分裂病や統合失調症の専門書を山のように買い込んで、猛烈な勢いでそれらを読破した。

入院後の長男の症状は思わしくなかった。毎日両手にいっぱいの薬を服用し、次に面会したときは、意識が朦朧とし、涎を垂らしていた。看護師をしていた友人の勧めで、彼女が勤務する国立精神・神経センター武蔵病院の診察を受けることになり、同センターの医師の強い勧めもあって、転院を果たした。そこでの治療方針が長男に合ったらしく、長男は徐々に快方に向かった。

■家族会の結成

身体障害や知的障害と違って、精神障害は思春期以降に突然に発症する。そのとき両親はすでに中高年に達しており、ほとんどの人が突然に自分たちを襲った事態をなかなか受け入れられない。発症した息子や娘は、それまでは健常者だったから、外見적으로는健常者と変わらず、それだけに友人、知人、親戚、ご近所に打ち明けることができず、家族だけで悶々とした日々を送る。もしも悩みを打ち明けられる人がいるとしたら、それは同じ入院患者の家族同士だけである。

そこで、国立精神・神経センター武蔵病院での4ヵ月半の入院期間中に、担当の朝

田隆医師の勧めもあって、風間さんは、同じ入院患者の家族同士で家族会「むさしの会」を結成した。家族会で話し合ううちに、医師に聞いてみたいことがいっぱい出てきた。精神分裂病とは何か、統合失調症とは何か、病院はそれをどのようにして治療するのか、家族はどうしたらいいか、医師とどうつき合ったらいいか…。朝田医師に相談すると、家族が抱えるそれらの疑問をすべてアンケートに書き出し、同センターの医師47人に分担して回答してもらえることになった。1つの質問に2人の医師がそれぞれの観点から回答する形をとり、後に『セカンドオピニオン』と題する本にまとめられて出版された（高橋清久監修、朝田隆編集、むさしの会協力、医学書院刊、2002年）。

長男はやがて、国立精神・神経センター武蔵病院を退院。多摩総合精神保健福祉センターのリハビリに通うようになった。ここでは通所者の家族を集めて、リハビリの受診方法についての勉強会が開かれ、その勉強会が終わってから、家族たちはいくつかのグループに分かれて、お互いの悩みを打ち明け合っていた。「むさしの会」での経験から、風間さんはここでも「家族会をつくりませんか？」と提案し、20人がそれに応じて「多摩草むらの会」が誕生した。1997年のことである。

■グループホームの設置

「多摩草むらの会」は障害者1人ひとり

がやりたいという仕事の草むらを、1つひとつつつくっていくことを目指した。「畑をしたい」と誰かが言えば、畑を借りて野菜をつくったり、「パソコンをしたい」という声があれば、会員の誰かの家に集まってパソコン教室を開いた。みんなでドッジボール大会、バーベキュー大会、お茶会、カラオケなども楽しんだ。

必要な資金を、当初は自分たちで稼ぎ出さねばならなかった。手の空いた父母と障害者たちで公園清掃やバザーなどを行い、さらに、地域の祭りやイベントごとに出かけて行って、水餃子をつくって売った。「多摩草むらの会」の看板を掲げ、テントを張り、その中でキャベツを切り、小麦粉を練って餃子をつくり、大鍋で茹で、井に入れてイベントの来場者に販売する。それによって少しずつ資金が溜まり、「多摩草むらの会」という名前も知られるようになった。障害者たちが参加した場合は、本人に1000円を支払い、残ったお金はプールして、22㎡のワンルームマンションを借り、そこを「多摩草むらの会」の拠点にした。

あるとき、ある精神障害者の母親が亡くなり、彼はひとりぼっちになった。家族会として彼をどこかのグループホームに入れようとしたが、どこもからも「すでいっぱいでは入れません」と断られた。その中に「ウチは家族会としてグループホームをつくっています。そちらでもつくったらいかがですか」と助言してくれるところがあっ

た。それを機に、自費で定員3人のグループホームを立ち上げ、半年後には6人に増やした。

当時、東京都は、精神障害者のグループホームを6カ所認可するとしていた。だがそれは、既存のグループホームがない地域に限られていた。多摩市にはすでに1カ所あったが、定員は6人と、とても足りなかった。そこで、多摩市の障害福祉課を通じて市長に陳情した結果、多摩市には半額を補助してもらえることになった。さらに多摩市から東京都に繰り返し働きかけてもらい、半年後には「多摩草むらの会」が、都内で7カ所目の障害者グループホームを開設することが認められ、残りの半額の補助が東京都から下りることになり、さらに職員を雇用することもできるようになった。2000年のことである。

■寒天茶房「遊夢」のオープン

2002年には、多摩市貝取の商店街活性化のために3障害協働の店を出店しないかという提案が多摩市からあった。それを受けて、市から3年間の家賃と光熱費の補助を受けながら、寒天料理の店を出すことを決めた。補助期間はその後1年延長された。

当時、障害者の店は、クッキーとパンの店ばかりだった。しかし、薬を飲み続ける彼らに、親としては、安心安全でおいしいものを食べてもらいたい。それならノンカロリーの健康食として寒天料理の店を出したら

どうかと考えたのである。これなら高齢者にも喜ばれるし、何よりも近くに競合店がない。独自の寒天料理のほか、寒天うどん、あんみつ、汁粉なども出そうと計画した。

良質の寒天を仕入れるために、オープンに先立って、数人のお母さんたちと一緒に、長野県の伊那食品工業を訪ねた。塚越寛社長（当時）は「寒天料理の店を出すというのはわかった。ところで、働く人たちにどうやって給料を払うのだ？」と尋ねたという。「障害者たちには時給400円を払おうと考えています。しかし、障害者の父母である私たちは全員、無償奉仕です。一銭ももらいません。これまでずっとそれでやってきたし、これからもそのつもりです」と風間さんは答えた。塚越氏は深く感じ入り「それなら、寒天の原材料はタダでいい。どんどん使え」と言ってくれた。店内をギャラリー喫茶風にしたと言うと、それならこれを飾ればいいと、自作の大きな写真を寄贈してくれた。さらに、同社の敷地内にあるレストランの看板を書いた高名な書家を紹介してもらい、破格の製作費で「遊夢」という看板をつくってもらった。欧米では精神障害者を「夢の中の人」と呼ぶが、夢の中の人遊びながら元気になれる場所という意味を込めてつけた店名である。

■トークサロンを開催して集客

障害者の就労支援ための作業所が各地にある。民間企業の下請で簡単な加工を引き



遊夢松が谷店の調理作業

受けて、作業に参加した障害者には加工賃が支払われるのだが、限られた時間と場所で指揮命令を受けながら行う単純作業は、精神障害者にはつらい場合があった。さらに、作業所の時給は、最低賃金にはるかに及ばず、数十円にしかならない。1時間働いたら、せめてジュース1本が買えるくらいは…と、「多摩草むらの会」は、時給400円を目指してきた。それだけ払える店にするために、父母たちはさまざまな工夫をこらし、条件を整えた。

来店者数を確保するために、評判を高めなければならない。そのために良質の原材料を確保し、メニューや調理方法にも工夫したほか、毎月1回、店内でトークサロンを開催し、あんみつ1杯付500円で、それに参加できるようにした。たとえば、2年前に起きた三宅島の噴火で島から避難した人と、それを支援している大学教授を招いて「三宅島の人々のいま」というテーマで話してもらったり、「かぐや姫、その悲しい瞳に残されたもの」というテーマで話してもらったこともあった。講演料を支払えなかったのが、好意に甘え、お礼として畑



夢畑の大根洗い作業

でとれた椎茸を差し上げたこともあった。このトークサロンのことが新聞に取り上げられ、「遊夢」の名前は広く知られるようになり、来店客も増え、障害者の店の進出に難色を示していた商店街の人たちからも感謝されるようになった。

■障害者自立支援法による追い風

2004年、「多摩草むらの会」はNPO法人として認定され、その2年後の2006年から施行された障害者自立支援法が追い風になった。従来は、通所作業所が居住自治体内にのみ限定されていたが、市域を越えて通所先を選べるようになったからである。自分自身の障害を知られたくない、地元の作業所に通うところを知った人に見られたくないという多くの精神障害者とその家族が、市域を越えて、「多摩草むらの会」に登録を申し込んできた。

障害者自立支援法では、登録した障害者の人数に応じて、行政から給付金が助成される。「多摩草むらの会」の登録障害者は拡大を続け、それまで無償奉仕を続けてきた父母たちに、わずかながら報酬が支払われ



パソコンサロン夢像でのパソコン作業

るようになった。さらに現在では、パートタイマーを含めて178人のスタッフが雇用され、この中には、従来無償奉仕を続けてきた父母たちの一部や、症状が回復した元障害者がP S W (Psychiatric Social Worker, 精神保健福祉士) の資格を取得し、障害者の支援に回るようになった人たちも含まれている。

「多摩草むらの会」は現在、次の11事業を展開している。

- 「寒天茶房・遊夢」…寒天料理のレストラン (多摩市貝取)
- 「まんじゅう屋遊夢」…和菓子製造販売の店 (八王子市松木)
- 「遊夢松が谷」…惣菜・弁当の製造販売の店 (八王子市松が谷)
- 「草夢」…公園清掃などを通じて障害者に就労体験の場を提供 (八王子市松が谷)
- 「夢来」…社会参加の訓練、郵便物の発送作業、内職作業、外販活動などの就労体験の場を提供 (八王子市別所)
- 「夢畑」…1999年にスタート。現在は10カ所約14,000平米の農園を運営し、法人内レストラン、惣菜店などに野菜を供給す

るほか、イベントなどで野菜を直売（事務所は八王子市堀之内）

- 「夢像」…パソコンを習いたい、就労のためにパソコン資格を取得したいという障害者のためのパソコン教室。書類作成、プログラミング、パソコンインストラクターなどの工賃作業も行っている（八王子市別所）
- 「夢うさぎ」…布バッグ、インテリア小物などを製作販売（ココリア多摩センター内）
- 「畑 de きっちゃん」…野菜創作料理の本格レストラン。他の事業所が時間給によって工賃を支払う就労支援B型事業所であるのに対して、ここだけは雇用契約に基づいて月額賃金を支払う就労支援A型事業所。症状の安定した障害者が就労（コ



社会福祉法人草むら（2018年12月14日認可）の計画中の本部事務所完成予想図を示す風間代表理事（左）と事務局の國本秀夫さん

コリア多摩センター内）

- 「グループホーム」…11ユニットで70人を収容
 - 「待夢」…八王子市からの委託事業として、精神障害者の就労相談業務を行う（八王子市松木）
- 会の設立のきっかけとなった風間さんの長男は、いま清掃事業を展開する「草夢」で元気に働いているという。

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中